

ヨーガの實踐とペルシア語訳 『ゴーラクシャシャタカ』

榊 和 良

はじめに

インド精神を貫く糸であるヨーガは、人間を肉体と精神の統合ととらえた心身観とそれらの浄化により自己認識を深める実修法として、驚異を超えて共感をもって受け入れられ、サンスクリット語古典のアラビア語やペルシア語への翻訳・翻案を生んだばかりでなく、イスラームの修道者たちの修道論にも取り入れられ、神と世界と人間をめぐる思弁哲学としても評価された。

アル・ビールーニーによるパタンジャリに帰せられる『ヨーガ・スートラ』のアラビア語訳やアブル・ファズルが『アクバル会典 (*Ā'in-i Akbarī*)』にペルシア語で紹介したスートラの梗概は、確かに古典ヨーガの思弁を伝えたがそれが広まることはなかった。イスラーム知識人や修道者たちの関心の多くは、ゴーラクシャナータ (*Gorakṣanātha*) を信奉するナータ派が伝えた古典ヨーガに基礎づけられた神観念や究極的救済に導く思弁と、それを獲得するための肉体と精神の浄化のための実践的な鍛練法にあった。

こうしたナータ派の教理や実践法の一部は、13~14世紀に翻訳されたと考えられる『甘露の水瓶 (*Amṛtakunḍa*)』のアラビア語・ペルシア語訳である『生命の泉 (*Ḥawḍ al-Ḥayāt*)』(HH) や16世紀半ばに著されたその翻案『生命の海 (*Baḥr al-Ḥayāt*)』(BH) として、イスラーム世界に幅広く伝播した⁽¹⁾。HHのもとになったと考えられる K.A.M.R.D.P.N.Ch.A.S.K.A (おそらくは

Kāmarūpapañcāśikā) は、シャムスッディーン・ムハンマド・イブン・マフムード・アムーリー (Shams al-Dīn Muḥammad ibn Maḥmūd Amūlī) によって著された『諸学の宝 (*Nafā'is al-Funūn*)』(1342) という120を超える学問分野を扱った百科事典の自然科学の項に、カーマーキヤ・デーヴィー (Kāmāk-dīv < Kāmākhyā-devī) の確立したヨーギン (jogī) の不思議な「息の学」とその苦行的実践法として忠実に引用され、イスラーム世界に知られることになる⁽²⁾。

この書には、『シヴァスヴァローダヤ (*Śivasvarodaya*)』(ŚSV) と題されて流布しているサンスクリット文献から、呼吸の実態や左右の鼻孔を通して起こっている呼吸の状態を観察することにより健康状態や戦勝、子供の誕生などを占う知恵や死の予兆とその排除のための行法が抄訳されている。後に述べるように、アル・ビールーニーも注目し、アブル・ファズルも詳説し、独立したペルシア語訳も残され、ヨーガ行者たちの獲得すべき知識と実践法の一つであると理解されていたことを過小評価することはできない。

本稿では、ハタ・ヨーガ (haṭha-yoga) として知られる側面をもったゴーラクシャナータの説いた実践ヨーガの教えを示す基本的文献とみなされる『ゴーラクシャシャタカ (*Goraḥśaśataka*)』をとりあげ、その主題や伝承の過程を探るために、ペルシア語訳やそれに関連する文献が、多様な形態をもつサンスクリット原典群と並んで、重要な資料となることを明らかにする。

1 古典ヨーガ文献を紹介した先駆的ムスリムたち

1.1 パタンジャリの古典ヨーガの伝播

古典ヨーガの思弁をイスラーム世界に最初に体系的に伝えたのは、『インド史』(1030) を著したアル・ビールーニーによる『インドのパータンジャラの書 (*Kitāb pātanjala al-hindī*)』であった。この書は、「テキスト本文とその注

釈で構成されたもの (kitāb pātanjala murakkaban naṣṣuhu bi-sharḥi-hi)」と示されるように、スートラそのものの忠実な翻訳というよりは、注釈書にもとづいて『ヨーガ・スートラ』を哲学書として扱った最初のイスラーム系言語への翻訳であると考えられる⁽³⁾。

全部で78の問答にまとめられる本文は、現在に伝わるサンスクリット原典と対照させてみると、ほぼ全体を網羅していることがわかる。問23までは第1章、24から41までは第2章、42から56までは第3章、57から78までは第4章に相当する。そして最後は「パタンジャリの書の救済（解脱）と合一に関する第4の部分の終わり」として、「全体は韻文で1100の詩節からなる」としめくくる。そのあとには、アル・ビールーニー自身のあとがきとして、インド人の信仰の在り方が論じられる。ギリシア哲学との比較も加えて、『インド誌』に部分的に引用したにもかかわらず、この書は広く読まれることはなく、唯一の写本しか残っていないが、この原点となったアラビア語訳は、『インド誌』が完成する以前にすでに翻訳が終わっていたものと考えられる。

16世紀初めに、ムガル帝国第3代皇帝アクバルのもとで『アクバル会典』を著したアブル・ファズルは、インド哲学諸派の解説で、現在に伝わるパタンジャリに帰せられる『ヨーガ・スートラ』の梗概を、忠実に簡潔に紹介した。その最後に4篇 (carāṇa) からなるとして、第1はJ.W.G (yoga) の本質について、第2はその方法について、第3はI.Y.S.R.J (aiśvarya) について、第4はM.K.T (mukti) についてと、その構成について紹介しているものの、本文はときにヴィヤーサの注釈をまじえつつ、1.1-11, 17-21, 23-24, 30, 33, 41-47 ; 2.3, 5-9, 12, 29-30, 32-33, 35-46, 48-51, 54-55 ; 3.1-5, 45, 51までの紹介にとどまっている⁽⁴⁾。

だが、ムスリム知識人や修道者たちの関心は、むしろ同時代のヨーガの実践者たちのもつ思弁と実際の肉体と魂の鍛錬法にあった。これらは後に紹介するように、14世紀から17世紀にかけての著名なスーフィーや文人たちに帰せら

れる修道論や雑録に含まれる小論などにまぎれこみ、さらに18世紀から19世紀に土着の近代諸語で表されたインド・ムスリムによるスーフィー文献に色濃く影を落としている。これらに示される小宇宙と大宇宙の相応、座法、呼吸法、脈管やプラーナの働き、7つのチャクラ (cakra)、クンダリニー・ヨーガ (kuṇḍalinī-yoga)、脈管の浄化法、五元素の観想法などは、ハタ・ヨーガの祖師の一人として名前を挙げられる、9世紀から13世紀頃の人とされるゴーラクシャナータを信奉するナータ派が伝えた思弁や実修法にもとづいている。

1.2 実践ヨーガの古典を伝える文献への言及

ゴーラクシャナータの名前はムスリムたちにも知られていた。既に紹介したように、13世紀なかばには伝えられていたであろう『甘露の水瓶』のペルシア語訳HHの第5章では、「生命の水 (mā' al-ḥayāt)」に到達した、すなわち靈知を獲得した逸話にちなんで3人のイスラームの預言者 (ハディル、エリア、ヨナ) が紹介されるが、ペルシア語訳では、ゴーラクシャ・ナータ (G.W.R.K.H.H) とチョーリングー・ナータ (Ch.W.R.N.G.Y)、マツツェンドラナータ (M.Ch.N.D.R.N.A.T.H) の名前をそこにイマームと呼んで同値している⁽⁵⁾。こうした対照がなされるということは、これらのナータ派の祖師たちについての逸話が広く知られていたことを示している。

17世紀半ばにイスラームに改宗したゾロアスター教徒とされるモーベド・シャー (Mobed Shāh) すなわちズルフィカール・アルディスターニー (Dhū al-Fiḡār Ardīstānī) (d.1670) によって著されたとされる、同時代のインドの宗教思想全般をまとめた宗教百科『諸宗派の学院 (Dabistān-i Mazāhib)』では、第2の教え「インド人の見解」の中で、第6の見解としてヨーガが取り上げられる。そこでは、次のような解説がなされている。

「ヨーギンらはインドにおけるよく知られたセクトである。ヨーガとはサン

スクリット語 (lughat-i S.H.N.S.K.R.T) で結びつけること (paywastan) を意味する。この宗派は、自らを神に到達した者 (waṣīlān-i ḥaqq) とみなす。神はアラク (alak) と呼ばれる。彼らの信じるところによれば、ゴーラクナータ (G.W.R.K.N.A.T.H.H) は神の本質であるとみなされている。同様に、マツェーンドラナータ (M.Ch.N.D.R.N.A.T.H.H) やチョーリンギーナータ (Ch.W.R.N.K.Y.N.A.T.H.H) は、シッダラ (S.D.H.A.N) すなわち完成者たち (kāmilān) であるという。彼らによれば、ブラフマー (B.R.H.M.A) もヴィシュヌ (B.Sh.N) もマハーシュヴァラ (M.H.Y.Sh) も天使たちであり、ゴーラクナータ (G.W.R.K.N.A.T.H.H) の生徒 (shāgirdān) で弟子 (murīdān) であるという。」
また「ムハンマドもゴーラクナータに教育を受け、弟子であるという⁽⁶⁾。」

さらにまた、「インドにおいてこの派の教えについての書物は数多いが、それらの中でもスヴァートマーラーマ・ヨーギン (S.W.A.T.M.A.R.A.M.J.W.G.Y) による『ハタ・プラディーピカー』 (H.T.B.R.D.A.N.K) がよく知られている。またゴーラクナータの著作のひとつである『ゴーラクシャシャタカ』 (G.W.R.K.S.N.K.H) と『アムリタクンダ』 (A.N.B.R.T.K.N.D) がある。筆者は文字 (の書かれた書) を見たが、ペルシア語にも訳されていて、Ḥawḍ al-Ḥayāt と題されていた。その書には、ゴーラクナータはハディルのようなもので、マツェーンドラはヨナのようにだと書かれていたが、この言葉は『アムリタクンダ』にはもともとはなかったものだ。」と述べている。この章で紹介されるヨーギンたちの実践法としては、7つのチャクラや3種の気道：イダー (idā), スシュムナー (suṣumnā), ピンガラ (piṅgalā), 10種のプラーナ, 白鳥真言 (haṁsa-mantra), クンダリニー, 座法, 調息法などがあげられる⁽⁷⁾。

このように、ナータ派の祖師たちの名前も、主要な文献名も、インドのイスラーム知識人や修行者たちには知られていたのである。

では、ここに言及された文献は、彼らにどのように伝わったのであろうか。最初に言及されるスヴァートマーラーマ (Svātmārāma) による『ハタ・ヨーガ・

ブラディーピカー (*Hathayogapradīpikā*)』(HYP)⁽⁸⁾あるいは『ハタ・ブラディーピカー (*Hathapradīpikā*)』(HP)⁽⁹⁾は、従来、ゴーラクシャナータが創始したとされるハタ・ヨーガを研究する上で基礎的資料として用いられ、現代のヨーガ実践者たちにも基本的テキストとして仰がれるが、14世紀半ばから16世紀半ばに編まれたと考えられる撰文集である。後に述べるようにサンスクリット・テキストに異なる版が見られるが、これを全体的にペルシア語訳したと考えられる資料は、まだ見つかっていない。

このゴーラクシャナータ、マツツェーンドラナータ、ダッタトレヤなどに帰されるサンスクリット語文献からの撰文集には、その詩節数においても内容についても、様々な不確定要素をもつ『ゴーラクシャシャタカ』から20詩節以上が引用されている。またおそらく、8支ヨーガにもとづくハタ・ヨーガの教えを体系的に初めて説いたと考えられる13世紀頃の『ダッタトレヤ・ヨーガシャーストラ (*Dattatreya Yogasāstra*)』に説かれる3つのムドラー (*mudrā*)、3つのバンダ (*bandha*)、ヴィパリータ・カラニー (*viparītakaraṇī*)、3つの浄化法 (*vajrolī, amarolī, sahajolī*)、5元素へのダーラナー (*dhāraṇā*) などからも引用があり、HHに共通する実践法がみられることも注目される。

この『ハタ・ヨーガ・ブラディーピカー』については、現在、広く用いられているテキストが4章：アーサナ (*āsana*)、プラーナーヤーマ (*prāṇāyāma*)、ムドラー、ラージャ・ヨーガ (*rāja-yoga*) からなるのに対して、全10章全626詩節からなる『ハタ・ブラディーピカー』(THP)⁽¹⁰⁾が存在していることも見逃せない。実は、その構成や内容が、ペルシア語訳『ゴーラクシャシャタカ』とも関連をもつのである。

一方、著者が見たという『甘露の水瓶』のペルシア語訳HHについては、すでに紹介したように、大世界と小世界である人体の相応、太陽と月に象徴される二つの鼻孔を通しての呼吸と、それにとまなう吉凶の占い、4種類の蓮華座 (パドマ、チャクリー (*cakrī*)、クックタ (*kukkuṭa*)、ガルバ (*garbha*)、エー

カパーダ・ガーラヴァ (ekapāda-gālava), アパーナとプラーナとして現れる気を制御する方法とその果報, 眼の浄化法としてのトラータカ (trāṭaka) や呼吸法により精液を引き上げるヴァジュローリーの技法, 身体内の7か所 (肛門, 肛門と生殖器官の間, 臍, 心臓, 喉, 眉間, 頭頂) の観想法とその果報, 死の予兆とその除去のための方法などが述べられ, 占術部分も含めてナータ派に関連をもつ実践法であることがわかる。

『諸宗派の学院』の著者が言及する『ゴーラクシャシャタカ』についても, 次章に述べるようにペルシア語訳が存在することが判明し, そこに伝えられたヨーガの實踐の知識は, かなり幅広いものであったことを示している。現代のヨーガ実践者たちは, HYP あるいは HP を引用しつつ発展させた形の17世紀後半の作品とされる『ゲーランダ・サンヒター (Gheraṇḍasaṃhītā)』や, これとほぼ同時代のものとされる『シヴァ・サンヒター (Śivasāṃhītā)』, 16世紀のプールナーナンダ (Pūrṇānanda) によって著された『シュリー・タットヴァチンターマニ (Śrī Tattvacintāmaṇi)』⁽¹⁾の第6章「6つのチャクラの解説 (Ṣaṭcakranirūpaṇam)」にもとづいてハタ・ヨーガの解説をすることが多いが, ペルシア語資料も, 単なる翻訳だけにとどまらず, 同時代のさまざまな情報を得ていたことを窺わせる。

2 『ゴーラクシャシャタカ』のペルシア語訳

2.1 『ゴーラクシャシャタカ』のサンスクリット語テキストをめぐる問題

ゴーラクシャナータに帰せられる数あるサンスクリット語文献の中でも, 『ゴーラクシャシャタカ』はナータ派の教えのエッセンスを集めたものとみなされ, HYP あるいは HP にも引用されていることはよく知られている。しかし,

の大本の抜粋 (précis) であると断言する。一方、201詩節からなる大本の系統は、もともと『ヴィヴェーカマールタンダ』して知られていたもので、これが『ゴーラクシャシャタカ』の名前で流布したのだと Bouy と同様の見方をとる。

Mallinson によれば、マドラス写本とカタログの上で知られている他の4本の写本からなるグループの『ゴーラクシャシャタカ』は、ほぼ100詩節余りからなり、その中核部分は1400年頃にかかれたと考えられ、同じ名前で『ヴィヴェーカマールタンダ』が広く知られるようになったので、もともとのテキストはあまり広まることなく、残された写本の数が少ないのだという⁽¹⁸⁾。

Bouy も示すように、『ゴーラクシャシャタカ』と同様の内容をもつさまざまな写本のタイトルや詩節数を見ると、確かに『ヴィヴェーカマールタンダ』と名づけられた200詩節あまりからなる写本も存在し、先に紹介したようにゴーラクシャナータを祀るゴーラクシャ・マンディルの出版した201詩節からなるテキストも、『ヴィヴェーカマールタンダ』のタイトルをもつ。呼称の上での混乱を避けるために、Mallinson は、他の系統とは趣を異にするこのマドラス写本グループのテキストを『ゴーラクシャシャタカ』と呼び、それがオリジナルの姿であると見る。そして、広く流布した200詩節あまりからなるヴァージョンを『ヴィヴェーカマールタンダ』と呼んで区別している。

Mallinson のマドラス写本にもとづく翻訳を、中核部分とされる7-64節についてみると、きわめて実践的側面が強調されたテキストであるとわかる。本文の主題は呼吸の制御にあり、そのための3つの方法として、節食、座法、そして女神 (サラスヴァティー) の目覚めを主眼とする実践法を説くことだとされる。2つの座法 (padmāsana, vajrāsana), サラスヴァティーを刺激してクンダリーニーを覚醒させる次第、プラーナーヤーマについては4種類の止息 (kumbhaka : sūryā, ujīyī, sītālī, bhastrī), さらに3種のバンダ (mūla, uḍḍiyāṇa, jālandhara) を具体的な身体技法として説く。そして定められた座法で座り、サラスヴァティーを刺激し、3種のバンダとともにプラーナーヤーマ

を実践するとサマーディを獲得できるという。ついでヨーガの実践の妨げとなる10種類が示され、クンドリニーの上昇のための実践法が詳説される。残りの部分は、ヴェーダーンタ的な比喩を用いて真理の認識の解説がときに繰り返しをとめないながら続き、最後はこれらの技法によって個我が最高我に消融する至福を味わうことの重要性を説いて終わる。

校訂テキストが未刊のために詳しく分析することはできないが、大本と比較してみると、ヨーガの六支のうち、ダーラナー、プラティアーハーラ、ディヤーナ、そしてディヤーナに関連して説かれるチャクラに関して、わずかしか言及されていないことがわかる。また先に述べた部分を繰り返す表現が多いことと、かなりヴェーダーンタ的要素の含まれた言説が織り込まれていることが明らかである。『ゴーラクシャシャタカ』のテキスト確定のために有益な発見ではあるが、この写本グループをオリジナルと見るにはまだ疑問の余地がある。

『ゴーラクシャシャタカ』(Mallinsonによると『ヴィヴェーカマールタンダ』)の写本が、さまざまなタイトルをもちつつ数多く残されていると先に述べたが、実は書写年代の明らかな写本のうち最古のものは1477年である。それを考えると、こうした伝承をもったヨーガの実践について詳細に叙述された歴史的証拠が、14世紀半ばのイスラーム系言語の資料に見出されるということは、注目すべきことなのである。ここに、ペルシア語で著された資料の重要性が見出せる。まずは直接的な翻訳と思われる2つの写本を見てみよう。

2.2 『ゴーラクシャシャタカ』のペルシア語訳の2つの写本

『ゴーラクシャシャタカ』のペルシア語訳は、現在のところ2種類見つかっている。一つは、British Museum 所蔵の写本 (BM)⁽¹⁹⁾と、もう一つは、インドのアリーガル・ムスリム大学所蔵の Habib Ganj Collection の写本 (HG)⁽²⁰⁾である。BM 写本のコロフォンによれば、書写された年代は、アーランギール

2世治世4年（ヒジュラ暦1170年）西暦1757年に相当する。一方の、HG写本には年代が示されていないが、同じ選文集の中に含まれている他の文献から推測して、17世紀には書写されたと考えられる。さらに後に詳述するが、BM写本には「デーヴィー・ダース・カーヤスタ (Devī Dās Kāyastha) の書 (pothī)」⁽²¹⁾という記載が加えられている。

2つの写本のタイトルは異なっている。BM写本では、マージンにはあるが、本文と同じ字体で、「G.W.R.K.H.H (Gorakha) の翻訳、すなわち M.Ch.N.D.R (Matsyendra) と G.W.R.K.H.H (Gorakha) の対話である」と書かれている⁽²²⁾ことから、カタログでも「ゴーラクの翻訳すなわちマツツェーンドラナータ (Matsyendranātha) とゴーラクシャナータ (Gorakṣanātha) の対話」と記されている。一方の、HG写本では「息の保持 (pās-i anfās)」と題され、スーフイー・シャリーフ (Ṣūfī Sharīf) がインドの言語から翻訳したと説かれる。そしてその後、「たとえ語られたものと一致しないとしても、意味においては十分に一致する」と付け加えられている⁽²³⁾。

さきにHG写本をもとに、主題の配列の一致、比喩表現が正確に訳し入れられていることなどから、この文献が『ゴーラクシャシャタカ』の201詩節からなる大本を翻訳した部分をもつことを示唆した⁽²⁴⁾が、本論では巻末に、二つの写本の配列に従って主題を示し、対応する大本、ナータ派に関連するサンスクリット語文献の箇所を対照した表を示した。二つの写本ともに、大本の配列に従っていることは明らかである。では具体的な特徴からもとになった伝承を探る糸口を検討してみたい。

2.3 『ゴーラクシャシャタカ』のペルシア語訳の示すもの

対照表からもわかるように、始まりにおいて、HG写本はイスラーム文献では恒例となっている神と予言者ムハンマドへの賛美を置くが、BM写本は省略

している。さらにHG写本が翻訳作品であることを示しているのに対して、BM写本はなんら言及していない。両者には、網羅されている内容にほとんど違いはないが、語彙の用法などを含めて表現上の差異があることは指摘できる。さらにサンスクリット・テキストとの対応と表現のち密さの点では、BM写本のほうが優れているとうけとられる。

第1の特徴は、伝承による師弟関係（ゴーラクシャナータはマツツェンドラナータの弟子）が逆転し、弟子であるマツツェンドラが、師であるゴーラクシャナータのもとを訪ねて解脱への道における行に悩む自らの状態を告白して教えを請うという設定になっていることである。双方の写本ともに、本文中で何度も「マツツェンドラよ (ayyu M.Ch.H.N.D.R)」という呼びかけを繰り返し、ゴーラクシャナータが弟子であるマツツェンドラナータに呼びかけるといふ形をとる。この弟子 (murīd, sālik) が師 (shaiḥ, pīr, murshid) のもとを訪ねて自らの修道過程における状況 (ḥāl) を告白して教えを請うという形は、スーフィー修道論における典型的なパターンであり、この弟子の修道過程の状況を把握して適切な助言をすることが師の義務であるともされる。

第2に、弟子であるマツツェンドラ・ナータが、師であるゴーラクシャナータに質問し、それに対してゴーラクシャナータが答えるという形をとっていることである。この翻訳では、序文にあたる部分のハイライトは、弟子であるマツツェンドラナータが師であるゴーラクシャナータにいくつかの質問をするところにある。それに対する師の答えがこの書の内容となっているからである。質問の内容は、BM写本のほうが明確である。①個我 (jān) とその意欲すなわちインドの言語で man (manas) は、この身体の中にどこから生じたのか。②その特徴はどのようなものか。③それはどのように現れたのか。④どこから現れたのか。⑤その誕生の最初はどれで終わりはどれか。⑥何のためにこれらは生じたのか。⑦この個我はいかなる行により自己の起源に戻り、この世界からの解放を獲得するのか⁽²⁵⁾。

こうした問いかけを見て思い出されるのは、パーシャ（土着語）で残された『ゴーラク語録 (*Gorakhbānī*)』⁽²⁶⁾に含まれるマツェーンドラナータとゴーラクシャナータの対話の形で表された「ゴーラクの目覚め (*Gorakhbodh*)」(GB) という63の対話である。この内容は極めて抽象的なもので、ここで問われている内容と完全に一致するものはみられないが、GB7に「心の姿（形）はどのようなものか」と問われ、師であるマツェーンドラナータは「こころとは空 (*sūnya*) である」と答え、GB31には「肉体の創造者は誰か」と問われ「ブラフマーが創造者である」と答えるのみである。ペルシア語訳では、これらの質問に続いて、心 (*qalb*) を *manas* と呼ばれているものと理解して、心のありか、その活動の現れ、活動停止、どうしたら心の安穩が得られるのかという、マツェーンドラの質問に対して、ゴーラクシャは喜悅を感じつつ答えるという形で本論を進めていく。

第3に、サンスクリット古典のイスラーム系の言語への翻訳においてよく用いられる聖典への言及が、ここにもわずかではあるが見られる。心の分析に関して、心がどこから現れてくるのかを語るゴーラクシャは、五元素からなる身体、感覚器官と五元素の関連、身体の中に現れている五元素のしるし、五元素の生成のプロセス、五元素それぞれのもつ特質 (*guṇa*) を説いて、自我をこれらから引き離すことを求める。元素を生じてきたのと逆のプロセスで源へと帰滅させ、最後に自我を無始なる本質に消融させることが、「地上にあるものはすべて滅びる。しかし貴高くも尊いお方である汝の主の顔は永遠にとどまる。」(クルアーン55:26) に示されているのだと説く。

第4に、ヨーガの修道法 (*ṭarīq-i sulūk*) については、HG 写本は「6つの行 (*ʿamal*) がある」としているが、BM 写本は「八支ヨーガ (*A.Sh.T.A.N.G.J.W.G : aṣṭāṅga-yoga*) すなわち行である」と述べる。しかし『ゴーラクシャシャタカ』本文に禁戒 (*yama*) と勸戒 (*niyama*) の説明が欠落しているように、ペルシア語訳でもそれに関する説明はない。六支について、HG 写本では「座りかた

(jalsa)」とのみ記すが、BM写本は「A.A.S.N (āsana) すなわち座りかた」と説明するのを除いては、両者ともに、P.R.A.N.A.Y.A.M (prāṇāyāma) は、息を吸うこと、吐くこと、息をとめておくこと、インドのことばでP.W.R.K (pūraka), K.N.B.H.K (kumbhaka), R.Y.Ch.K (recaka) ; P.R.T.Y.A.H.A.R (pratyāhāra) は心を感覚器官の対象から引き離すこと ; D.H.A.R.N.A (dhāraṇā) は心を安定させ服従させること ; D.H.Y.A.N (dhyāna) は願うもの (maṣṣūd) を念想する (taṣawwur) こと ; S.M.A.D.H (samādhi) は対象 (maṭlūb) に没入すること (istighrāq) であるという共通の理解を示す。

第5に、音写語はそれほど多くはないが、たとえば大本からの引用と考えられる7か所の比喩表現の中の「個我 (jān) はこれら二つの風 (プラーナとアパーナ) の間で、Q.N.D.Q の如くに、時には上に行ったり時には左に行ったりする。」という表現は、大本38,39の「長い腕で投げつけられた木の球 (kanduka) が (はね返って) 上に上がっていく如くに、個我 (jīva) はプラーナとアパーナに投げられて落ち着かない。左や右を通るプラーナとアパーナに支配されて、個我は上下に動き落ち着かないゆえに知覚されない。」⁽²⁷⁾をうけている。現在に伝わるテキストに実に忠実な翻訳という側面をもつという印象をうける。

最後に、大本の配列に従いつつも、HPなど関連文献の翻訳も入り込んでいることである。たとえば、大本64 (=小本34) には「舌を反り返らせて頭蓋の穴に入れ、視線を眉間に集中することが、ケーチャリー・ムドラー (khecārī-mudrā) である」というケーチャリー・ムドラーの定義づけがなされるが、具体的手段は示されず、すぐにその果報が説かれる。BM写本はこの定義づけを忠実に翻訳しただけでおわるが、HG写本はそのための詳しい手段を述べる。そこでは「舌に塩や粉末の黒胡椒を2時間すりこんで、両手の指で伸ばし、それからうすい布でやさしくひっぱり、親指と人差し指の爪でひき伸ばして、舌の付け根にある黒と赤の脈管をゆっくりとゆっくりと引っ張る。時間がたてば眉間からブラフマ・ランドウラと呼ばれるところまで届くようになる。」とい

う手順が示される。HYP3.32, HP3.31, THP5.37に大本と同じ定義づけがあるが、ペルシア語訳に見られる塩や黒胡椒の手法は、HYP3.35ab, HP3.34abに、布の使用はTHP5.41に、眉間から頭頂 (brahma-randhra) まで届くようになることはHYP3.33cd, HP3.32cd, THP5.38, 43-45に示されていることがわかる。

以上、対照表や主な特徴からもわかるように、ペルシア語訳は大本に基づいていることが明白だが、もっと幅広い伝承にもとづいていると考えられる。

2.4 ペルシア語訳の典拠とされるサンスクリット文献

別表に示したように、全体の構成の上で、イスラーム的な神や預言者への賛美を除いて、世界の生成過程の解説から始まる最初の部分は、大本にみられないことがわかる。大宇宙と小宇宙としての人間の相応関係については、他のナータ派文献にも言及されることはあるが、ここに見られるような考え方はどこからきたものなのか。

ここで注目されるのは、サンスクリット語で表されたナータ派関連文献の中でも、『ゴーラクシャシャタカ』大本の内容をも含む、独立した文献としてトリヴァンドラムから出版された『ヴィヴェーカーマールターンダ (Vivekamārtāṇḍa)』(VM)⁽²⁸⁾である。先に紹介した『ゴーラクシャシャタカ』の異名としてのテキストではなく、それを含む撰文集と考えられるものである。

VMの構成をみておこう。VMは全体が6つの「智慧 (prabodha)」からなり、第1は帰敬序と分別の賞賛、第2は人間の欲望などの汚れについて、第3は人間の心の働きについて、第4は時の数え方と呼吸の数、元素と呼吸の関係、左右の鼻孔を通る息の状態から病氣や吉凶を占うこと、そして死の予兆が「スヴァラの章」としてŚSVを引用しつつ説かれ、さらに第5は「解脱への階段は第4で述べた死の予兆学にもとづく死を欺くこと (kālasya vañcana) にある」として「心は感受などへの執着を離れて最高我に向かうべきである」として、創

造と帰滅のプロセスが説かれる。そこに五元素のそれぞれの特質とそれぞれの帰滅のための観想法が説かれるのである。

VMの第6は大本6-198節(15-16, 21, 30-31, 179, 185, 195-96を除く)を、第3にも大本178, 181-2, 185-187節を含み、さらに第5の2-19節は、先に紹介した10章からなる『ハタプラディーピカー』(THP)第1章13-28節と一致している。このTHPの構成は、第1章元素からなる肉体とヨーガの支分、第2章アーサナ、第3章6種の浄化法、第4章プラナーヤーマ(8種のクンバカ)、第5章ムドラー、第6章プラティアーハーラ、ダーラナー、ディヤーナ、第7章ラージャ・ヨーガ、サマーディの次第、第8章ナーダの観想法、第9章死の予兆、第10章有身解脱(videhamukti)となっている。

VMはヴィシュヴァールーパデーヴァ(Viśvarūpadeva)に帰せられているが、この人物について詳しいことはわかっていない。VMの編者は、著者が住んでいた町の名前やバルトリハリの『ヴァイラーギヤ・シャタカ(Vairāgyaśataka)』や『アディアートマ・ラーマーヤナ(Adhyātmarāmāyaṇa)』に類似する詩節があることから、その年代は7世紀を下らないとみているが、小本の編者らはこの作品が繰り返しの多い選文集にすぎないとして、ヴィシュヴァールーパデーヴァの年代も根拠が乏しいと認めていない。

ペルシア語訳では、質問に対するゴーラクシャナータの最初の答えは、「最初に生まれたものはjānでありそれは神の純粹本質を現す」という。それに引き続いてmanasが生じ、自我意識と理性が生じて、そこから五元素の合成物である肉体が生じたのだという。そこには元素の属性が現れ出ており、感覚器官の活動がインドのことばでkarmaと呼ばれるものが生まれそこに善と悪が生じ、それがjānを束縛するのだと説く。それゆえjānをこれらから引き離すことを求める。ここからは微細なものの説明であると説かれる。生成と逆の順序で元素を帰滅させていき、虚空をjānに、jānを無始なる本質に消融させる。ここで説かれる内容は、VM5.1-17, THP1.12-33までの抄訳となっている。そし

てこれがクルアーン55：26に示されることを示しているというのである。

聖典クルアーンの55章は「慈悲深いお方の章」と題されて創造主としての神の偉大さを称える章で、26節には「地上にあるものはすべて滅びる。」27節には「しかし貴高くも尊いお方である汝の主のお顔は永遠にとどまる」と説かれる。これは、被造物である我々や世界は死すべき存在であるのに対して、創造主である神の限定された姿である名は普遍であることを示すものとしてよく引用される聖句でもある。創造と帰滅のプロセスに関して、神の本質（神の名）が自己顕現するという意味で、スーフィーたちも好んで用いている。

ついで元素から構成される自己自身の姿を念想 (taṣawwur) する方法が説かれる。そこで説かれる心の分析は、まさにVMの第5章終りの部分に展開される心の働きの列挙である。BM写本では、まず、「音と触感と姿形と味と香りは *rasa, rūpa, gandha, sparśa, śabda* と呼ばれるが、感覚器官 (*ḥawāss < ḥassat* の複数形) と理性 (*‘aql*) と自我意識 (*anāniyyat*) は *manas (M,N)* と *buddhi (B.D.H.H)* と *ahaṁkāra (A.H.N.K.A.R)* であるが、これら8つは蓮の心 (*qalb-i ṣanawbarī*) の中にある」と述べてから、心の働きを列挙していく。

HG写本は「誕生、死、怠惰、不安、夢眠、空腹、病氣、世間の活動；暑さ、渴き、平静、沈滞、怒り、恐怖、無知、これらを離れた人はシッダ (*S.D.H < siddha*)、ゴーシュティー (*G.Sh.T < goṣṭhī*) すなわち完成者 (*kāmil*) となる。また虚飾、快活さ、親切、不幸、勇敢さ、恐怖、臆病、驚き；忍耐、信仰、偽善、憂鬱さ、人との交際、戦闘意欲、熟慮、高慢さ；人に奉仕したい欲望、嘘、愚鈍、無知、嫌悪、孤独、忘却、醜さ、疑惑、不正直、狂気、罪を犯すこと；*sattva-guṇa (S.T. G.N)* すなわち忍耐、*tamo-guṇa (T.M.G.N)* すなわち怒り、*rajo-guṇa (R.J.G.N)* すなわち支配、つまり怒りと忍耐の平衡状態、善行、偉大さ、神を求めること、靈知、執着、なしたこと・これからなすことの連鎖、これらは人間を束縛し、心の鏡を曇らせるものである。』⁽²⁹⁾と締めくくる。

VM5.29-39abでは、5つの感覚器官の対象と理解力、思考、自我意識の8種、

誕生, 死, 眠り, 不安, 恥, 飢餓, 渴, 驚き, 病氣, 後悔の10種, 暑さ, 乾き, 快樂, 汗, 激怒, 悲哀, 同情, 困惑の8種, 性愛, 慈悲, 笑, 凶暴性, 勇氣, 恐れ, 嫌悪の8種, 忍耐, 知恵, 切望, 信, 同情, 偽善, 傲慢, 満足, 落胆, 幸運の10種, 鈍感, 短気, 傲慢さ, 勇猛さ, 嫉妬, 快活さ, 眠り, 競争の8種, 嫌悪, 病氣, 怠惰, 愛情, 無関心, 殺生, 昏迷の8種, 信賴, 忘失, 激怒, 傲慢, 知恵, 反省, 堅固さ, 従順さの8種, サットヴァ, ラジャス, タマス, 知恵, 離欲, 自在力, ダルマ, 八方守護神, 楽, 苦の10種が心の中にあることをヨーギンは知るべきであると説かれる。

BM写本はHG写本に比べるとよりVMに近く, これらの心の働きを8, 10, 8, 8, 10, 8, 8, 8種類にグループ化して列挙し, 最後に「3つのグナと善行, 神を求めること, 救済, 靈知, 何であれ不幸や幸福をもたらすものが心の中にはある」とまとめる⁽³⁰⁾。

以上, 見てきたようにVMとTHP, HYP, HPに見られる伝承が, HG写本とBM写本のペルシア語訳の基礎をなしているのである。

3 ヨーガの実践法を伝えた翻訳者たち

3.1 スーフィー・シャリーフと先駆者たち

先にナータ派の教理の一部は, 13~14世紀に翻訳されたと考えられる『甘露の水瓶』のアラビア語・ペルシア語訳である『生命の泉』や16世紀半ばに著されたその翻案『生命の海』として, イスラーム世界に幅広く伝播したと述べた。はじめは具体的な名称を伴って説かれなかったヨーガの実践法は, BHによって原語表現を伴いより具体的な解説を加えたうえに, イスラーム化されてスーフィー修道法にとりこまれた。

確かに, 重訳が繰り返された『マハーバーラタ』や『ヨーガヴァーシシュタ

『*Yogavāsiṣṭha*』などにもヨーガの知識は説かれ、訳文中の注釈的説明にも、これらの知識や身体技法の伝播を読み取ることもできる。けれども、スーフィー修道論や雑録に含まれる小論にも、八支ヨーガ (*aṣṭāṅgayoga*)、3種の氣道 (*nāḍī* : *iḍā*, *piṅgalā*, *suṣumnā*)、プラーナーヤーマ (*prāṇāyāma* : *pūraka*, *recaka*, *kumbhaka*)、ディヤーナ (*dhyāna*)、サマーディ (*samādhi*)、アナーハタ・シャブダ (*anāhata-śabda*)、アジャパー・ジャパ (*ajapā japa*)、パドマ・アーサナ (*padmāsana*)、プラーナ (*prāṇa*)、アパーナ (*apāna*)、クンダリニー (*kuṇḍalinī*) などの術語を伴って、ヨーガの思弁や実修法が自らの修道体系に照らして描かれているのである。

HG 写本の訳者とされるスーフィー・シャリーフという人物が何者であるかはわかっていない。同じ名前、ジャハーンギール皇帝 (在位1605-27) に捧げられた『ヨーガヴァーシシュタ・サーラ (*Yogavāsiṣṭhasāra*)』のペルシア語訳、さらに『光の発見に関する様々な不思議なやり方 (*Gharā'ib al-Aṭwār fi Kashf al-Anwār*)』と題された『ハリ・ハラ・サンヴァーダ (*Hariharasaṃvāda*)』と題されたマハーデーヴァとクリシュナの対話からなるペルシア語訳、そして「スヴァローダヤの書 (*pothī svarodaya*)」のペルシア語訳である『息の靈知 (*Ma'rifat-i Anfās*)』が残されていることは注目される⁽³¹⁾。

ŚSV は、『全哲学綱要 (*Sarvadarśanasāṅgraha*)』におけるヨーガの解説にも引用される⁽³²⁾。タントラ文献や占星術に分類されるこの占術文献に示される呼吸の観察やそれに基づく占いは、アル・ビールニーも占術書として認めていたが、『甘露の水瓶』に関連する文献が広まって以来、ムスリム知識人や修行者たちの関心を集めてきた。このスヴァラの学とそれによる予知学などを主題とする文献群は、写本においても異なる名前をもち、その分布や詩節の数などからみても、現在刊行されているものよりはもっと豊かな内容を含むものが流布していたことは疑いない。

『甘露の水瓶』の伝えた「スヴァラの学」はアラビア語にも翻訳され、『息の

特性 (*Khawāṣṣ al-Anfās*)』として写本が残っている⁽³³⁾。ペルシア語訳としては、HH や BH, 『諸学の宝』に取り込まれたばかりでなく、アブル・ファズルの『アクバル会典』に紹介されるスヴァラの学⁽³⁴⁾に50詩節以上が訳し入れられているほか、独立した翻訳として、スーフィー・シャリーフによる『息の靈知 (*Ma'rifat-i Anfās*)』があるほか、キルパール・ダース (Kīrpāl Dās) による『靈知の大海 (*Muhīt-i Ma'rifat*)』(1754) は、サダー・シヴァ (Sadā Śiva) による「スヴァローダヤの書 (pothī svarodaya)」の翻訳と謳われるように、全16章のうち前の9章までが ŚSV の抄訳であり、後半にはラーム・バクティ、サーンキヤ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、ハタ・ヨーガ、八支ヨーガが説かれていることから、広くムスリム社会に知られていたことを証明する文献である。

イスラームの修道者たちは、ヨーギンらとの直接的交流を通して、史書や聖者伝の伝える超能力合戦に示されるような実践的技法だけでなく、より体系的な知識を獲得し、自らの修道法と調和させた結果、イスラーム化されたヨーガという形を生み、ペルシア語だけでなく『パドマーヴァト (*Padmāvat*)』に代表されるように近代インド諸語でその教えを文学作品の形で残したのである。

3.2 デーヴィー・ダース・カーヤスタをめぐる

BM 写本に言及されたデーヴィー・ダース・カーヤスタ (Devī Dās Kāyastha) とは何者か。ここに紹介する写本は、『真理の精髓 (*Sāra Tattva*)』(ST) (ペルシア語タイトル *Khulāṣah al-Khulāṣah*)⁽³⁵⁾と題される幅広い学問分野のサンスクリット古典のペルシア語訳や翻案、綱要書を撰述し、さらに会計学をはじめとして、記数法、文書起草法、能書学、詩作法などの実学を加えて「書記のための鑑文学」としての要素も併せもつ作品で、ヒジュラ暦1084 (1673) 年に完成した。著者は、デーヴィー・ダース・カーヤスタと名乗る。

自伝的叙述からは、サンスクリットの伝統的学問を身につけイスラーム的な

環境で育ったヴィシュヌ派を信奉するカーヤスタが、宮仕えをする中で自己について探究しようと思案を深め、アヨーディヤーに巡礼に出かけ、精神的導師らとの交流や書物を通しての勉学の結果、それらのエッセンスを選び出して『真理の精髓』と名づけたというのである。

デーヴィー・ダースはこの書を7章に分ける。それぞれの章に表題はないが、そこに含まれる主題を示す見出しによると、1章では世界の創造から始まる世界と神と人間の関係、2章では人間存在の精神生理学的な探究、音楽、馬学、王朝史、軍事など諸学の概観、3章では自らの属するコミュニティであるカーヤスタの起源から著者自身の家系、幾何学や占星術をはじめとして書記階級に必須とされた学問や技術の概要、4章では出家者と在家者のダルマ、ヴァルナ・アーシュラマのあり方、5章では日々の儀礼や有徳の行為、6章ではブラフマンについて、サーンキヤ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ、息による占いなど、そして7章では神を知るための靈知とヨーガの知識を含む解脱に至るための書物が紹介される。

この書に含まれる出典が明らかにされている作品としては、*Mahābhārata*, *Viṣṇu-purāṇa*, *Gītāsāra*, *Laghuyogavāsiṣṭha*, *Aṣṭāvakra-gītā*, *Kokaśāstra* などがあり、さらにタイトルへの言及はないものの、*Baḥr al-Ḥayāt*, *Śivasvarodaya*, *Majma' al-Baḥrayn*, *Mukālīma Bābā La' l wa Dārā Shukoh*, *Sālīhotra* などが含まれる。このようにみると、ある意味ではこの書は、サンスクリット古典のペルシア語訳や翻案などのアンソロジーといえる。そして、1章、2章、4章、6章に、BH や ŚSV が細かな注釈をともなって訳し入れられている。ここに見られるイスラーム的注釈は、マージンに注釈を伴ったBHの写本にもとづくこともわかる⁽³⁶⁾。

もし翻訳者とは著者の表現や思想やスピリットを共有すべきだというならば、デーヴィー・ダースはヒンドゥーの書記階級の一人として、自らの文化社会的アイデンティティを示した先駆的な翻訳者の一人であったということがで

きるであろう。クルアーンの聖句や信仰篤いフレーズやハディースを引き合いに出しつつも、土着の言語でドーハーを挿入し、インド哲学における一元論的な考えをイスラーム的な術語に置き換えて説明する姿には、言語としてのペルシア語ばかりかイスラーム学も身に着けたヒンドゥー書記の能力の高さを窺い知ることができる。その人物にこのBM写本が関係づけられるのである。

(まとめ)

ヨーガの実践が、スーフィー修道論の思弁的枠組みや修道法と調和された事例は、インドにおけるチシュティー教団の祖師ムーヌッディーン・チシュティー (Mu'in al-Dīn Chishtī d.1236) に帰せられる『ヨーガの手ほどき (Sarmāyah-i Jog)』⁽³⁷⁾、同じチシュティー教団サービリー派のスーフィー、アブドゥル・クッドゥース・ガンゴーヒー (‘Abd al-Quddūs Gangohī d.1537) の『導きの書 (Rushd Nāmah)』や、アブル・ファズルの兄のファイズイー (Faiḍī d.1595) に帰せられる『叡智の閃光 (Shāriq al-Ma‘rifah)』⁽³⁸⁾や、アブドゥル・ラフマーン・チシュティー (‘Abd al-Raḥmān Chishtī) による『生類の鏡 (Mir’āt al-Makhlūqāt)』⁽³⁹⁾などに見られる。

ウパニシャッドのペルシア語訳で知られるダーラー・シュコーの著作『二つの海の交わる場所 (Majma‘ al-Baḥrayn)』(1655)⁽⁴⁰⁾では、スーフィーの瞑想の対象となる神観念を表わす術語に, nirañjana, śūnya, svāntaryaなどが含まれ、小世界と大世界の本質的相同性や、座法や調気法、瞑想法の手段として、呼吸しているだけで無意識に haṃ と sa と唱えることになるという無音念誦 (ajapā-japa, haṃsa-mantra) が最も重要なズィクルであると紹介され、さらに止息 (ḥabs-i dam) によって獲得される10種類の音 (鐘の音や笛の音など) が、預言者ムハンマドに啓示が降りたときの音に相応すると理解されているのである。スーフィー修道論『神への導きの書 (Risālah-i Haqq Numā‘)』⁽⁴¹⁾でも内的

ヨーガの實踐とペルシア語訳『ゴーラクシャシャタカ』

浄化の階梯, ズィクルの實踐法, 内的深化の境地に, ヨーガの知識がはさみこまれていること, 『ヨーガヴァーシシュタ』のペルシア語訳を行わせたこと, 書簡や対談集からダーラー・シュコー自身が, ヴィシュヌ派やシヴァ派のバクタらと親交を深めていたことなどを考えると, これらの文献資料は, 当時のイスラーム知識人に伝わっていたヨーガの實踐に関する広範な知識のイスラーム的受容の姿を示すものでもある。

ここに紹介した『ゴーラクシャシャタカ』の内容を含む二つのペルシア語訳で, 大本の翻訳部分の前枠におかれた元素からなる個我の念想のための教えは, VM 5 章のはじめの部分に相応し, その最初の部分はさきに紹介した全10章からなる THP 1.13-28に相応すること, さらに HYP や THP からの詳しい修行法も引用されて全体が構成されていることが明らかになった。

「息の学」も含めたナータ派の教理や実践法を伝える選文集が広く流布しており, それが14世紀から18世紀半ばまでのペルシア語文献に大きな影響を与えていることは確かである。それゆえ, ナータ派のサンスクリット文献の発展を探る上で, ペルシア語資料は大いに力があるといえる。さらにまた, スーフィーたちが自らの修道論と実践に, ナータ派の思弁と実践を受容し消化していった姿も示してくれるのである。

ペルシア語訳『ゴーラクシャシャタカ』とサンスクリット原典対照表

| 主題 | BM | HG | 関連文献 |
|------------------|-----|-------|--------------------|
| 神と予言者ムハンマドへの賛美 | - | 1b | - |
| 原典の説明 | - | 1b-2a | - |
| 物語の開始 | 40a | 2a | - |
| マツェエンドラのゴーラク訪問 | 40a | 2a | - |
| マツェエンドラの悩める状態の告白 | 40b | 2a | - |
| マツェエンドラのゴーラクへの質問 | 40b | 2ab | - |
| ゴーラクの満足と教示の開始 | 40b | 2b | - |
| 本来清浄無垢なる個我 | 40b | 2b | VM5.2, THP1.13 |
| 人体と五元素との関係とその特性 | 40b | 2b | VM5.3,4 THP1.14,15 |

| | | | |
|-----------------------|---------|--------|------------------------------------|
| 善悪業の発生と個我の束縛 | 40b | 2b | VM5.5,6, THP1.16,17 |
| 五元素の生成とその特性 | 40b | 2b-3ab | VM5.7-13, THP1.18-24 |
| 五元素の帰滅による解脱の獲得 | 41a | 4a | VM5.16, THP1.25 |
| クルアーン55.26への言及 | 41a | 4a | - |
| 欲望による個我の束縛 | 41a | 4ab | VM5.25, THP1.29 |
| 心臓に個我が宿ること | 41a | 4b | VM5.28 |
| 心の働き | 42a | 5ab | VM5.29-39 |
| ヨーガの実修が解脱に導くこと | 42a | 5b | VM5.44 |
| ヨーガの6つの支分 | 42b | 5b | NGŚ7 (KGŚ4) |
| 84の座法 | 42b | 5b | NGŚ8,9 (KGŚ5,6;VM6.6,7) |
| 2つの主要な座法 (パドマ、シッダ) | 42b | 5b-6a | NGŚ10-12(KGŚ8,9;VM6.8-10) |
| 7つのチャクラ | 42b,43a | 6a | NGŚ15-24(KGŚ10-15; VM6.11-18ab) |
| カンダに発する72000の脈管 | 43a | 6a | NGŚ25(KGŚ16;VM6.18cd,19ab) |
| 10の主要な脈管の名称 | 43a | 6b | NGŚ27,28 (KGŚ18-19; VM6.20cd-22ab) |
| 3つの主要な脈管の名称と働き | 43ab | 6b | NGŚ29 (KGŚ20; VM6.23cd, 24ab) |
| 10のプラーナ | 43b | 6b | NGŚ33 (KGŚ24; VM6.25cd, 26ab) |
| プラーナとアパーナの特性 | 43b | 6b | NGŚ34,41 (KGŚ29;6.25cd,26ab) |
| 木の球の比喩 | 43b | 6b | NGŚ38,39 (KGŚ27,26; VM6.30) |
| クンダリニー・シャクティ | 43b | 6b | NGŚ47,48 (KGŚ30; VM6.38) |
| 針と糸の比喩 | 43b | 7a | NGŚ49 (KGŚ31ab; VM6.41cd, 42ab) |
| シャクティ・チャーラナ | 43b | 7a | NGŚ50 (KGŚ32cd) |
| 鉤の比喩 | 43b | 7a | NGŚ51 (VM6.42cd,43ab) |
| 汗で身体を摩擦することと避けるべき食事 | 43b | 7ab | NGŚ53 (KGŚ50; VM6.45) |
| ケーチャリー・ムドラーとその果報 | 43b,44a | 7b | NGŚ64-66 (HYP3.3-37; VM6.55-57) |
| 月の甘露 | 44a | 7b | NGŚ96-98 (VM6.86-88) |
| プラーナーヤーマの作法 | 44a | 8a | NGŚ95 (VM6.85) |
| ナーダが聞こえること | 44a | 8a | NGŚ101 (VM6.91) |
| プラーナーヤーマの果報 | 44a | 8a | NGŚ119 |
| 心を制御するためのプラーナーヤーマ | 44a | 8a | NGŚ90 (KGŚ39; VM6.80) |
| プラーナーヤーマの3つのプロセスとその単位 | 44a | 8a | NGŚ103(KGŚ47;VM6.93) |
| プラーナーヤーマの段階 | 44a | 8b | NGŚ106 (KGŚ48; VM6.95) |

ヨーガの實踐とペルシア語譯『ゴーラクシャシャタカ』

| | | | |
|------------------|---------|-----|---|
| ブラーナヤーマの果報 | 44b | 8b | NGŚ107 (KGŚ49; VM6.96) |
| ブラーナヤーマの具体的作法 | 44b | 9a | NGŚ108 (KGŚ41; VM6.98) |
| ヨーガの4つの支分の果報 | 44b | 9a | NGŚ112-13 (KGŚ54-55; VM6.102-3) |
| ヨーガの4つの支分の相互関係 | 44b | 9a | NGŚ114-15 (VM6.104-5) |
| ナーダ音の観想法 | 44b | 9b | NGŚ118 (VM6.108) |
| 10種類のナーダ音 | - | 9b | - |
| ブラーナヤーマの誤った作法と結果 | 44b | 10a | NGŚ120 (VM6.110) |
| 象や虎の比喩 | 44b | 10a | NGŚ121 (HYP2.15; VM6.112) |
| プラティアーハーラの定義 | 44b | 10a | NGŚ123 (KGŚ55; VM6.113) |
| 太陽光の比喩 | 45a | 10a | NGŚ124 (VM6.114) |
| プラティアーハーラの作法 | 45a | 10b | NGŚ126-130 (VM6.115-16) |
| プラティアーハーラの果報 | 45a | 10b | NGŚ140 (VM6.130) |
| ダーラナーによる8シッディの獲得 | 45b | 10b | NGŚ149 (VM6.140) |
| ヨーガの支分の次第 | 45b | 11a | NGŚ153 (KGŚ69; VM6.144) |
| ダーラナーの作法 | 45b | 11a | NGŚ154 (KGŚ68; VM6.145) |
| 元素の帰滅のプロセス | 45b | 11b | - |
| 五元素の観想とその果報 | 45b,46a | 11b | NGŚ155-160 (KGŚ69-74; VM6.146-150) |
| 2種類のディヤーナ | 46a | 12a | NGŚ163 (KGŚ77; VM6.160cd, 161ab) |
| 7つのチャクラのディヤーナ | 46ab | 12b | NGŚ165-70 (KGŚ78ab; VM6.163cd-169ab) |
| 7つのチャクラのディヤーナの果報 | 46b | 13a | NGŚ178 (KGŚ88; VM6.176cd, 177ab) |
| サマーディの本質 | 46b | 13a | NGŚ185 (VM3.51) |
| 塩と海の比喩 | 46b | 13a | NGŚ186 (VM3.49,6.184) |
| サマーディの果報 | 47a | 13b | NGŚ189,192-93 (KGŚ98,92,99; VM6.190,193-94) |
| バター油や牛乳の比喩 | 47a | 13b | NGŚ197 (KGŚ100; VM6.196) |
| ハタ・ヨーガという呼称 | 47a | 13b | - |
| 完全なる師とは | 47a | 13b | - |
| ヨーガ行の果報 | 47a | 13b | - |
| マツェェンドラの得た果報 | - | 14a | - |

- 1 詳細については、榎 和良『『甘露の水瓶 (Amṛtakuṇḍa)』とスーフィー修道法』、「東洋文化研究所紀要」, 第139冊, 平成12年3月, 239-272頁および *Yogico-tantric Traditions in the Ḥawḍ al-Ḥayāt*, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 2005, 135-156 参照。
- 2 *Nafā'is al-Funūn fī 'Arāyis al-'Uyūn*. ed. Sha'rānī Abū al-Ḥasan, Tihiran : Kitāb Farūshī., 1381 (2002), Vol.3, 360-365. この源となったテキストについて、アムーリーは、K.M.R.W.Y.N.Y.S.K.A と呼んでいる。 *Ibid.* 360. cf. Ernst Carl W., *A Fourteenth-Century Persian Account of Breath Control and Meditation*. In *Yoga in Practice*, ed. White, David Gordon, Princeton : Princeton University Press, 2011, 133-39.
- 3 Ritter, Hellmut, *Al-Bīrūnī's Übersetzung des Yoga-sūtra des Patanjali*. *Oriens*, ix, 1956, 165-200. Pines, Shlomo and Gelblum, Tuvia, *Al-Biruni's Arabic Version of Patanjali's "Yogasutra"*, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 29, no. 2, 1966, 302-325 ; vol. 40, no. 1, 1977, 522-549 ; vol. 46, Pt. 2, 1983, 258-304 ; vol. 52, Pt. 2, 1989, 265-305.
- 4 *The Ā'in-i Akbarī*, Abu'l Faḍl , ed. Blochmann, H., Calcutta : The Asiatic Society of Bengal, Fasciculus IX, 1869, 89-96. .
- 5 榎 『『甘露の泉 (Amṛtakuṇḍa)』とスーフィー修道法』, 244頁, 注55参照。
- 6 *Dabistān-i Mazāhib*, Mobeḍ Kaykhusraw Isfandiyyār : ed. Riẓāzādah Malik, Raḥīm, Tihiran : Kitābkhānah-i Ṭahūrī, 1362 (1983), vol.1, 159.
- 7 *ibid.* 158-166.
- 8 *The Haṭhayogaṣraddhīkā of Svātmārāma : with the commentary Jyotsnā of Brahmānanda and English translation*, Madras : The Adyar Library and Research Centre, 1972. ここではこのテキストを HYP として用いる。
- 9 全5章からなる *Haṭhapradīpikā* も校訂出版されている。 *Haṭhapradīpikā of Svātmārāma*, ed. by Swami Digambarajī and Kokaje, Raghunatha Shastri, 2nd ed, Lonavla : Kaivalyadhama S.M.Y.M. Samiti, 1998. ここではこの校訂本を HP として用いる。
- 10 *Haṭhapradīpikā with 10 chapters of Svātmārāma, and Yogaṣrakāśikā, commentary by Bālakṛṣṇa*, eds. Gharote, M.L., and Devnath, Parimal, Lonavla : The Lonavla Yoga Institute, 2001. ここではこの校訂本を THP として用いる。
- 11 この書は、シヴァチャンドラ・ヴィディヤー・アルナヴァ (Śivacandra Vidyārṇava) に弟子入りしたとされる弁護士で美術鑑定家でもあったアーサー・アヴァロン (Arthur Avalon) 別名ジョン・ウッドロッフ (John Woodroffe 1865-

- 1936) により、1918年に英訳されて西欧の学者に知られるようになったもの。
 Arthur Avalon : The Creation of a Legendary Orientalist, Taylor, Kathleen, In *Myth and Mythmaking, continuous evolution in Indian Tradition*, ed. Leslie, Julia, Richmond : Curzon, 1996, 144-163.
- 12 *New Catalogus Catalogorum*, ed. Kunjunni Raja, K., Madras : University of Madras, vol.5, Madras 1971, 175-176. *Descriptive Catalogue of Yoga*, comp. Gharote, M.L., Bedekar V.A., Lonavla : The Kaivalyadhama S.M.Y.M.Samiti, 1989, 44-58.
- 13 Gorakṣaśatakam, ed. Kuvalayānanda, Svāmī and Shuklā, S.A., *Yoga-Mīmāṃsā*, vol. VII, No.4, Lonavla : Kaivalyadhama S.M.Y.M. Samiti, 1959, 1-83. ここではこの校訂本を小本 (KGŚ) として用いる。邦訳は、遠藤康, 「インド中世ヨーガ文献の研究 : 『ゴーラクシャ・シャタカ (Gorakṣaśataka)』 (小本) 試訳」『愛知文教大学比較文化研究』9, 2008, 39-74参照。
- 14 *Das Gorakṣaśataka*, ed. with German translation by Nowotny, Fausta, *Dokumente der Geistesgeschichte* 3, Köln : Karl A.Nowotny, 1976. ここではこの校訂本を大本 (NGŚ) として用いる。
- 15 Bouy, Christian, *Les Nātha-yogin et les Upaniṣads*, Paris : De Boccard, 1994, 22.
- 16 Mallinson, James, The Original Gorakṣaśataka, in *Yoga in Practice, op.cit.*, 257-272.
- 17 Bouy, *op.cit.*, 24, 40 f.n.154. cf. Mallinson, James, *The Khecarīvidyā of Ādinātha : A Critical Edition and Annotated Translation of an Early Text of Haṭhayoga*. London : Routledge, 2007.
- 18 Mallinson, 2011, *op. cit.*, 264-65.
- 19 Add5651, ff.40a-47b. *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, Rieu, Charles, London : British Museum, 1966 (Reprint of the 1879-1883 edition), vol. 3, 59. この写本では最初の部分にアブル・ファズルに帰せられる『バガヴァッド・ギーター』の翻訳 (ff.1-35b), 次いで BH の第2章の左右の鼻孔を通る息による占術部分 (ff.36a-39b) が書写されている。
- 20 Habib Ganj Collection 21/346 (ff.1b-14a). *Catalogue of Manuscripts in the Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University*, comp. Razvi, M.H.and Qaisar, M.H., Aligarh : Aligarh Muslim University, 1985, vol.1, pt.2, No.740, 143.
- 21 BM f.47b. pothī は「書物」「手控え」といった意味をもつヒンディー語。Az pothī とあることから、著者名とすることも可能である。
- 22 BM f.40a.
- 23 HG f.2a.

- 24 榊 和良：「ナータ派研究—『息の保持 (Pās-i Anfās)』, 『インド哲学仏教学』第18号, 平成15年, 107-121頁。
- 25 BM f.40b.
- 26 *Gorakhbānī*, ed. Barthwāla, Pītānbardatta, 5th edn., 2001, Prayāga : Hindī Sāhitya Sammelana.
- 27 ākṣipto bhujadaṇḍena yathoccalati kandukaḥ /
prāṇāpānasamākṣiptas tathā jīvo na tiṣṭhati // 38
prāṇāpānavaśo hy adhaś cordhvañca dhāvati /
vāmadakṣiṇamārgeṇa cañcalatvān na dṛśyate // 39.
- 28 *The Vivekamārtāṇḍa of Viśvarūpadeva*, ed. Śāstrī, Sāmbaśiva K., Trivandrum : Government Press, 1935.
- 29 HG 4b-5a.
- 30 BM f.42a.
- 31 Habib Ganj Collection No.24/3, Maulana Azad Library. Razvi and Qaisar, op. cit., 143.
- 32 榊 和良, 「『全哲学綱要』に現れた「スヴェアラの学」」, 『印度哲学仏教学』第19号, 平成16年10月, 132-156.
- 33 Asiatic Society of Bengal, 1527. Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Collection of the Royal Asiatic Society of Bengal, (eds.) Husain, Hidayat, M., Mahfuz ul-Haq and Ishaque, I., Calcutta : Royal Asiatic Society of Bengal, 1939, vol.2, 211-212.
- 34 Āīn-i Akbarī, *op.cit.*, Fasciculus XI, 1870, 124-128.
- 35 Khulāṣah al- Khulāṣah, Habib Ganj Collection No.24/3, Maulana Azad Library. f.9a., f.566a. cf. Razvi, M.H. and Qaisar, op. cit., 143.
- University.
- 36 HH, BH には枠物語としてシハーブッディーン・スフラワルディー (Shihāb al-Dīn Suhrawardī d.1191) の「愛の論攷 (*Fī Ḥaqīqat al-'ishq yā mu'nis al-'ushshāq*)」が挿入されている。そこでの心の働きを示す箇所。ST ff.55b-56b に BH の写本の一つ Habib Ganj Collection No.21/112 (Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University) f.41b のマージンにある注釈が加えられている。
- 37 cf. Ernst, Carl W., Two Versions of a Persian Text on Yoga and Cosmology, Attributed to Shaykh Mu' īn al-Dīn Chishtī, *Elixir* 2, 2006, 69-76,124-5.
- 38 Shāriq al-Ma'rifa, in *Rasā'il*, Lucknow : Nawal Kishore Press, 1885. cf. Ernst, Carl W., Fayzī's Illuminationist Interpretation of Vedānta : The Shāriq al-Ma'rifa,

Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East, 30/3, 2010, 156-64.

- 39 マハーデーヴァとパールヴァティーの対話からなるこの宇宙論と修道論は、『バ
ヴィシユヤ・プラーナ』の影響を受けていると考えられ、ヨーガの實踐法としては
7つのチャクラ、3種のシャクティ、3種の氣道、5種のプラーナなどに言及する
が、現在 Svevo D'Onofrio が校訂を進めている。
- 40 *Majma' al-Baḥrayn* には *Majma' al-Baḥrayn or The Mingling of the Two Oceans by
Prince Muhammad Dārā Shikūh*, ed. Mahfuz al-Haqq, M. Calcutta : The Asiatic
Society, 1982 (1929) と、*Majma' al-Baḥrayn*, ed. Jalālī Nā'īnī, Tehran, 1956 (1983)
という刊本があるが、どちらも限られた写本にもとづき、アラビア語訳やサンスク
リット語訳を参照することもなく校訂されたものである。この *Khulāṣah al-
Khulāṣah* にも引用箇所があることから、これまでに見つかった書写年代が明らか
なものの中で最古のものが1721-22 であることを考えると、これを含めた新たな
校訂本が求められる。
- 41 *Risālah-i Ḥaqq Numā'*, Dārā Shukoh, Lucknow : Nawal Kishore Press, 1874.

Persian Translations of the *Goraḁṣaṣataka*

Kazuyo SAKAKI

A number of Sanskrit works are attributed to Gorakṣanātha. Among them, the *Goraḁṣaṣataka* is considered as one of the authoritative texts that contain Nātha doctrines. With regard to the transmission of the *Goraḁṣaṣataka*, we have located some remarks on the number of verses and variety of manuscripts. Despite the varied number of verses in the text, only two versions have been found to have been published with different titles. One version has 101 verses as its name *ṣataka* indicates, and another version contains over 200 verses. The latter is the more prevalent text. Recently, another short version has been introduced as the original *ṣataka*. We can add two Persian manuscripts which contain the *Goraḁṣaṣataka* in the form of a conversation between Matsyendranātha and Gorakṣanātha. One is the *Retention of Breath (Pās-i Anfās)* and another is the *Translation of Gorakh (Tarjumah-i Gorakh)*. Despite the different titles, different translation styles, omissions, and additions, they are supposed to have been based on almost identical texts or oral tradition that contain the same number of verses as the longer version. Thus far, the examination of Persian translations has clarified that the source text may have been some kind of compendium of Nātha doctrines. It may have been the *Vivekamārtāṇḁa* ascribed to Viṣvarūpadeva, which fixes the longer version of the *Goraḁṣaṣataka* in the core and contains the part of the *Śivasvarodaya*. The introductory part of this book has common verses in the first chapter of the *Haṁṁpradīpikā* with ten chapters. Since the date of the transmission of the *Cistern of Life (Amṛtakunḁa)* in the 13th century, the science of the breath (*svarajñāna*) has been prevailed among the Islamic intellectuals and the Sufi circles. They left indispensable materials for the study of the formation of Nātha literatures.